

CES 2026 REPORT

WHEN AI GAINED A BODY

テクノロジーが「身体」を持ちはじめたとき

A Designer's
Perspective on
Technology,
Systems, and
Experience

テクノロジー、システム、
そして体験をデザイナーの
視点から読み解く

日本語版

2026.01.19. VERSION 01

© 2026 Argenta Park. All rights reserved.
本レポートに掲載されている内容の無断転載・複製を禁じます。

WHAT IS CES?

CESは、世界最大級のテクノロジー展示会であり、グローバルブランド、スタートアップ、メディア、政策関係者が一堂に会する場である。もともとはコンシューマーエレクトロニクスを中心とした展示会として始まったが、現在ではAI、ソフトウェア、B2B、産業システム、サービスまでを含む、より広範なテクノロジープラットフォームへと進化している。

2026年の来場者数は148,000人を超え、前年から約7,000人増加した。一方で、出展社数は約4,500社から4,100社へと減少している。

来場者は増えたが、展示は減った。この構造的な変化は、会場全体の雰囲気にも反映されていた。

(数字はCES公式ページより引用)

来場者数

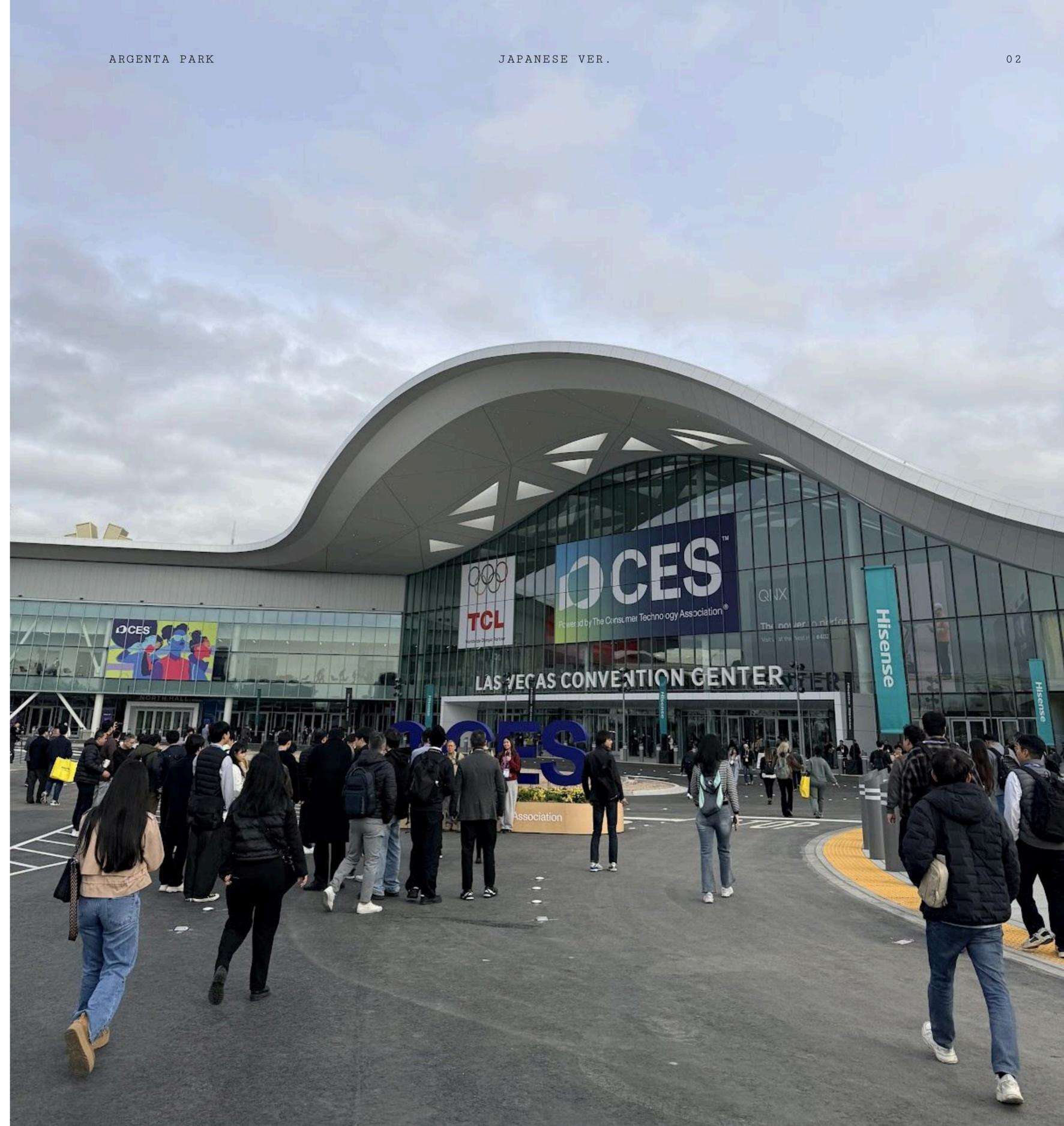
148,000+

前年比 ▲+7,000

出展社数

4,100+

前年比 ▼-400



WHO THIS REPORT IS FOR

このレポートの対象読者について

本レポートは、デザイナーの視点から、デザイナー、プロダクトリーダー、そして実世界でテクノロジーを形にしていくチームに向けて書かれている。筆者は過去6回、今年まで4年連続でCESに参加しており、本レポートでは単年のトレンドではなく、複数年を通して見えてきたパターンや変化、違和感に焦点を当てている。

これは展示内容を網羅するカタログではなく、むしろ、テクノロジーをどのように読み解き、どのように意味づけるかを考えるための、編集的・解釈的なレポートである。

ABOUT THE AUTHOR



Sanae Tanaka Wilson

Sr. Product Designer
Argenta Park

www.argentapark.com/

www.linkedin.com/in/sanae-wilson/



*本レポートの共同執筆者である JohnRobert は、大学院進学のため今年是不参加となります :)

Executive Summary

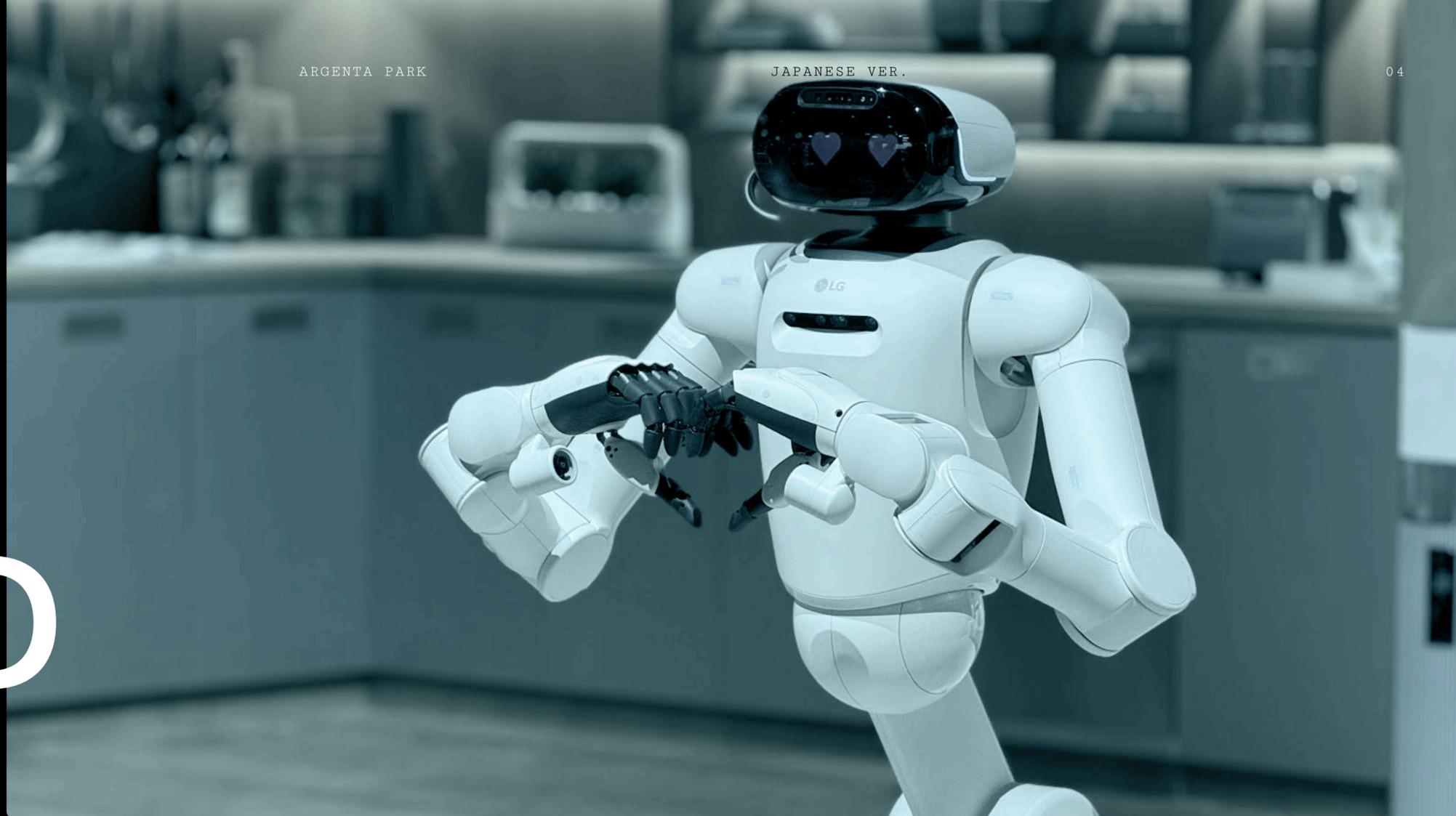
WHEN AI GAINED A BODY

テクノロジーが「身体」を持ち始めたとき

**ROBOTS ARE READY.
THE EXPERIENCE IS NOT.**

ロボットは、もう準備ができている。
体験は、まだ追いついていない。

- **CES 2026を象徴していた存在は、ロボットだった。** Physical AIは、もはや概念や将来像として語られるものではなく、会場のあちこちで実体を持ち、動き、存在感を放つものとして現れていた。
- **中国を中心とした量産体制の成熟や、製品化を前提とした技術進化によって、ハードウェアの完成度は大きく向上している。** 一方で、技術的な能力と、ユーザー体験としての完成度の間には、明確なギャップが見え始めていた。
- **多くのプロダクトは「できること」を示していたが、「なぜそれが使われるのか」「どのように日常に組み込まれるのか」については、まだ十分に語られていない。**
- **その中で、実環境で動き続ける自律システム——AI in motion は、Physical AIの中でも特に完成度が高く、実用性を感じさせる存在だった。**



WHEN AI GAINED A BODY

テクノロジーが「身体」を持ちはじめたとき

ROBOTS ARE READY. THE EXPERIENCE IS NOT.

ロボットは、もう準備ができている。体験は、まだ追いついていない。

01

THE RISE OF PHYSICAL AI

Physical AIの台頭

ROBOTS WERE EVERYWHERE—BUT THEIR ROLES WEREN'T.

ロボットはどこにでもいた。しかし、その役割はまだ定まっていなかった。

06

02

WOW VS. WHY

Wow と Why

THE UX GAP IN ROBOTICS

ロボティクスにおけるUXのギャップ

10

03

AI IN MOTION

動き出すAI

REFERENCE POINT OF PHYSICAL + AGENTIC AI

Physical AI × Agentic AI の基準点

13

04

HEALTH, TRUST, AND CREDIBILITY

ヘルスケア領域における信頼と信頼性

WHEN TECHNOLOGY HAS TO WORK

テクノロジーが「確実に動く」ことが求められるとき

17

01 THE RISE OF PHYSICAL AI

Physical AIの台頭

ROBOTS WERE EVERYWHERE —BUT THEIR ROLES WEREN'T.

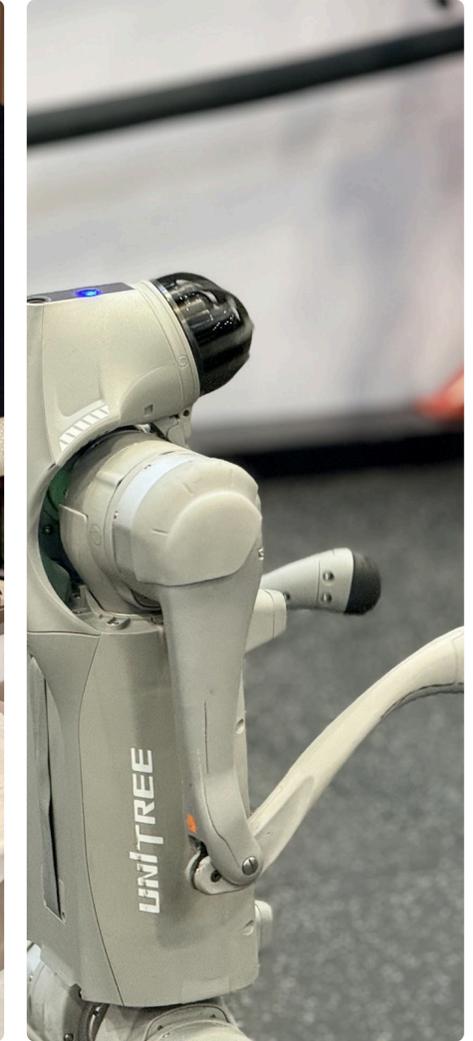
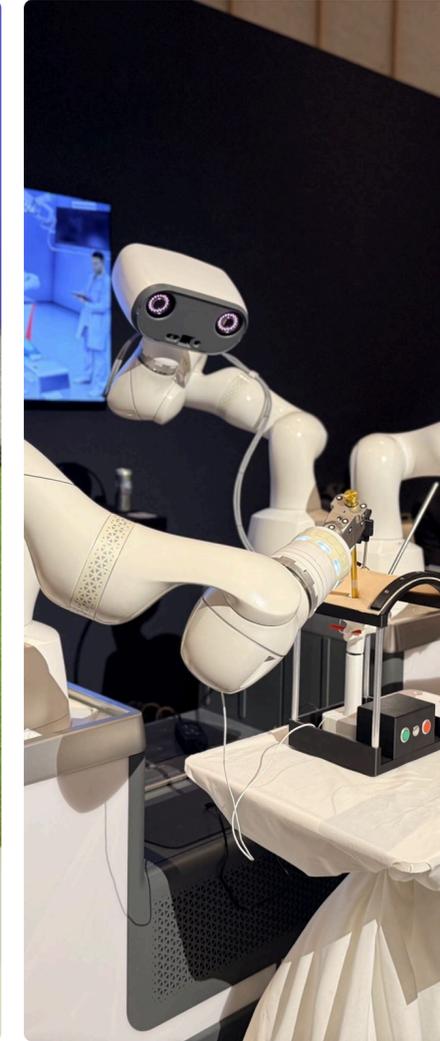
ロボットはどこにでもいた。でも、その役割はまだ定まっていなかった。

CES 2026は、Physical AI*が戦略的なキーワードから、目に見える現実へと移行した年だった。前年のCESで、NVIDIAのCEO Jensen Huangが「次のフロンティア」として語ったPhysical AIは、今年ついに会場全体で具体的な形を伴って現れた。

近年のCESは、ソフトウェアやサービスの比重が高まり、物理的なプロダクトの存在感は相対的に薄れていた。そこに再び戻ってきたのが、質量を持ち、動き、空間を占有するAI——ロボットである。

※ Physical AI：現実世界を感知し、行動し、応答する物理システムに組み込まれた知能





ROBOTS EVERYWHERE

会場を埋め尽くすロボットたち

会場の至るところに、人型や動物型のロボットが展示されていた。人に近い身体、顔、ジェスチャーを持つそれらは、直感的に理解しやすく、感情的な距離も近い。

その結果、ロボットはCES 2026で最も写真に撮られた存在となり、視覚的にも今年のCESを象徴するアイコンとなっていた。

ROLES STILL UNDEFINED

未だ定義されていない役割

多くのロボットは、高度な能力を実演していた。洗濯物を畳み、ゲームをし、複雑な動作をこなす。

しかし、その先にある役割は依然として曖昧だ。家電なのか、アシスタントなのか、ツールなのか、あるいはペット的なコンパニオンなのか。能力の進化に対して、役割の定義が追いついていない。

結果として、家庭や職場、さらには社会全体の中で、これらのロボットがどのような位置を占めるのかはまだ見えていない。

*“Is this a tool, an assistant,
or just a demo?”*

これはツールなのか。アシスタントなのか。
それとも、ただのデモなのか？





A QUIETER CES

落ち着きを見せたCES

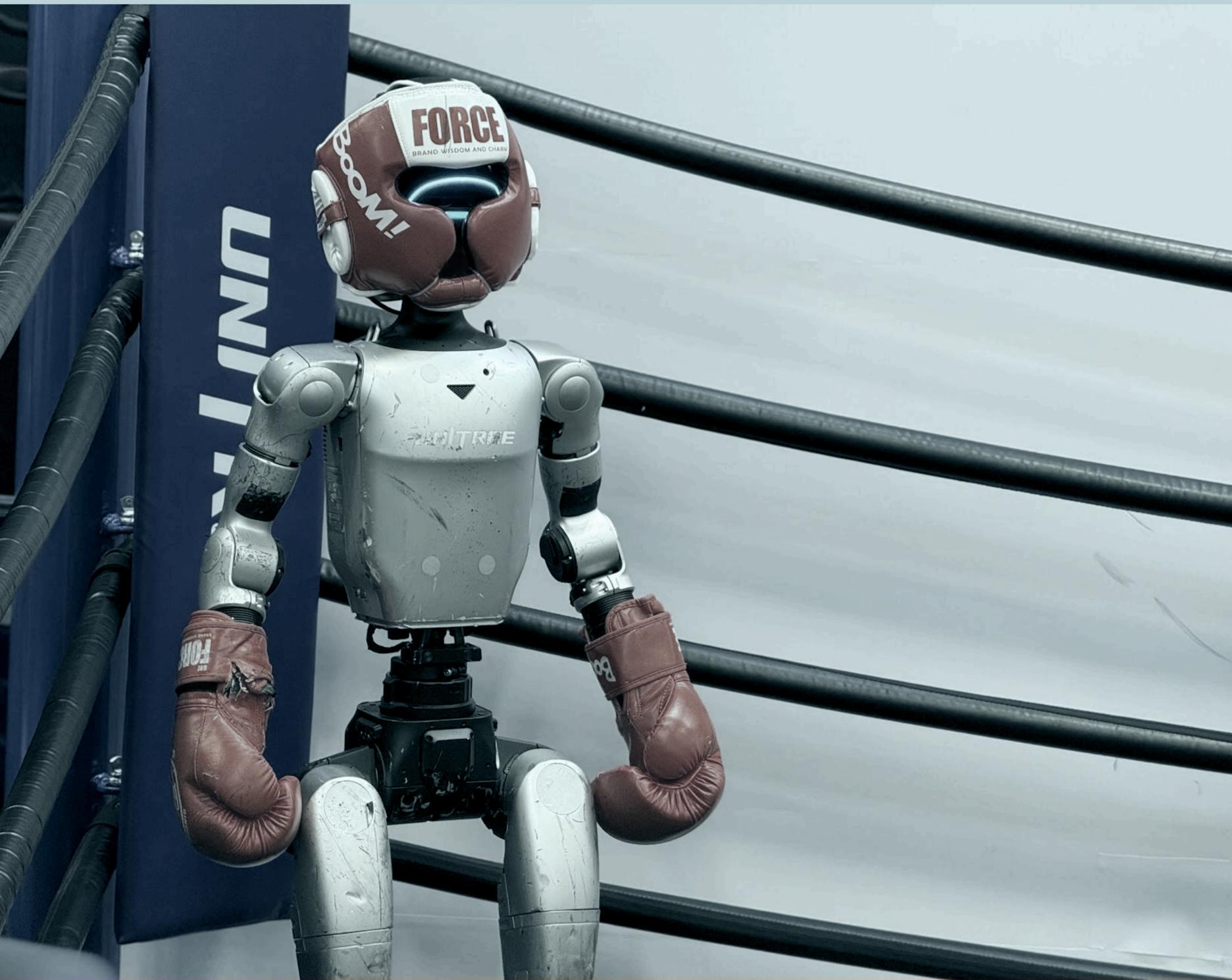
ロボット以外の領域では、CESは例年よりも静かに感じられた。それはイノベーションが停滞したからではない。むしろ、製品や技術が実装と展開のフェーズに入ったことを示している。

多くのブランドが大規模ブースを縮小し、招待制やメディア向け展示へと移行していた。この変化は、製品の成熟度と、現在の経済環境の両方を反映していると考えられる。

Samsungの動きは象徴的だった。前年には大規模で演出の強い展示を行っていたが、2026年はメディア限定の存在へと切り替えている。

製品自体も、既存コンセプトの延長線上にあるものが多かった。Sony Honda MobilityのAfeelaは、前年とほぼ同じ構成で展示されており、大きな変化は見られなかった。

製品が現実に近づくにつれ、イノベーションは派手さを失い、積み重ねの性質を帯びていく。CES 2026は、そうしたフェーズに入ったことを静かに示していた。



02 WOW VS. WHY

Wow と Why

THE UX GAP IN ROBOTICS

ロボティクスにおけるUXのギャップ

ボクシングロボット、ジャンプする掃除ロボット、卓球をするロボット。これらは即座に「Wow」を生むデモだった。高度な制御技術や運動性能は、確かに成熟しているように見えた。

一方で、デモを見終えた後に残る問いは共通している。これは、なぜ日常に必要なのか？

THE UX GAP

体験設計に残るギャップ

ロボットの性能自体は、実用に近づいている。しかし、その周囲にある体験——購入、セットアップ、メンテナンス、故障時の対応、長期的な価値——については、ほとんど説明されていなかった。

CESのデモは、「できること」を強く印象づける。だが、「使い続ける理由」までは提示していない。

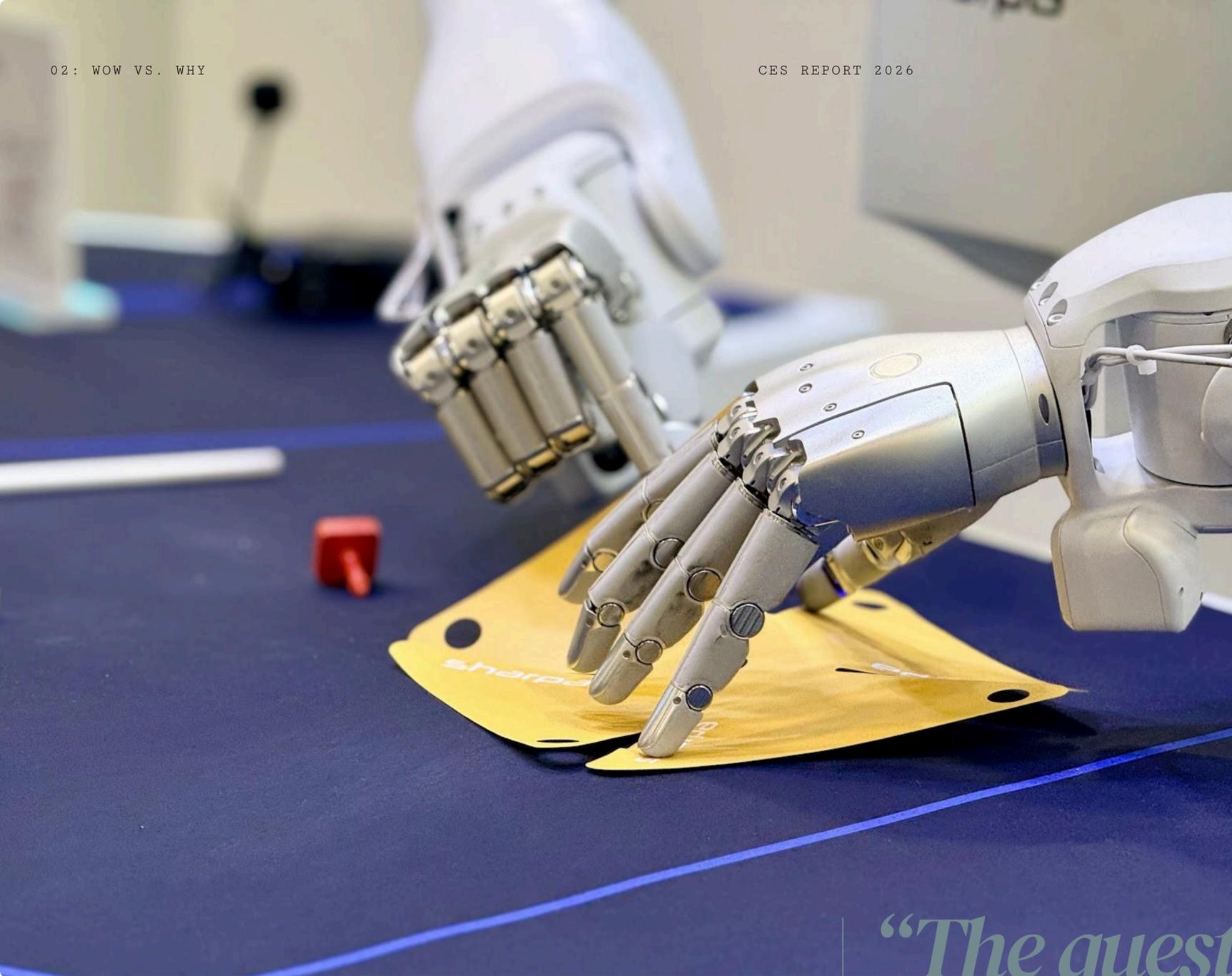
会期中、実際に不具合を起こすロボットも複数見られた。こうした場面は、信頼性やリカバリー設計がまだ十分に解決されていないことを浮き彫りにしていた。

“If users don’t know what happens when things go wrong, trust never forms.”

何かうまくいかなかったときに何が起こるのかわからなければ、信頼は生まれない。



洗練されたデモが印象的だった一方で、会期中にトラブルを起こすロボットも複数見られた。信頼性や、問題発生時の対応設計には、まだ課題が残っていることがうかがえる。



FORM FACTOR AS DESIGN QUESTION

その形は、本当に最適なのか

人型ロボットは、感情的に理解しやすく、ユーザーとの距離を縮めやすい。また、AIが人の動きを学習するという点でも合理的な選択だ。

しかし、多くのタスクにおいて、それが最も効率的な形とは限らない。CES 2026は、このデザイン上の問いを明確に示していた。

人型は直感的だが、必ずしも実世界に最適とは言えない。ここには、デザイナーが介入できる余地がある。

模倣を超え、目的、文脈、共存を前提としたロボットの身体を再設計すること。それが、次のPhysical AIに求められている。

“The question is no longer whether robots can move like humans—but whether they should.”

問われているのは、ロボットが人のように動けるかではない。そうすべきかどうかだ。

03 AI IN MOTION

動き出すAI

REFERENCE POINT OF PHYSICAL + AGENTIC AI

Physical × Agentic AI の基準点

自動運転車、ロボタクシー、農業機械。動き続けるAIは、複雑な現実環境の中で機能している。

知覚し、判断し、計画し、行動する。この一連のプロセスを継続的に回し続けることが、Agentic AI の特徴だ。



PLATFORMS AND AUTONOMY

プラットフォームと自律性

特にモビリティ領域における Agentic AI*は、CES 2026の中でも最も完成度が高い事例だった。これらのシステムは、単発のタスクではなく、時間や文脈、不確実性をまたいで知能を統合している。

Zooxは、展示にとどまらず実運用に踏み込んでいた。West Hallでの展示に加え、ラスベガス・ストリップで一般向けのライドを無料で提供していた。

ロボタクシー自体は、すでに一部地域で商用運行が始まっている。それでも印象的だったのは新規性ではなく、体験の完成度だった。ライドは驚くほどスムーズで、「特別さ」を感じさせないこと自体が、技術の成熟を示していた。

※ **Agentic AI** とは、周囲の状況を捉え、自ら判断して行動し、その結果を学習に反映しながら、継続的に機能し続けるAIシステムのこと。



CES会場周辺で体験したZooxの自動運転ライド。
ラスベガスではすでに複数の車両が実際に運用されており、体験は一貫してスムーズだった。CES期間中の混雑時でも待ち時間は約20分程度で、単なるデモではなく、実際のサービスとして稼働していることがうかがえる。

AUTONOMOUS SYSTEMS IN PRACTICE

実運用に入った自律システム

CES 2026では、自律システムが個人向けモビリティ、シェアードトランスポート（公共交通）、産業用途まで、幅広い領域で展開されていた。自律システムは、もはや単なる展示ではなく、実装された現実として提示されている。



個人所有を想定した自動運転車

Tensor Robocar：個人所有を想定したレベル4自動運転車。オープンソースのAI学習プラットフォーム「OpenTau」とセットで提案されている。自律運転を、限られた企業だけのものから、開発者にも開かれた存在へと広げようとする動きが見て取れる。



量産を見据えたロボタクシー

Lucid × Nuro × Uber：量産を前提としたロボタクシー協業。自律モビリティがコンセプトから競争市場へ移行しつつあることを示す。



すでに現場で稼働している産業・農業車両

John Deere：自律型の農業・産業車両が大規模に稼働。センサー、AI、統合システムによる効率化とサステナビリティを実運用で示している。



“The car is no longer the product — the system is.”

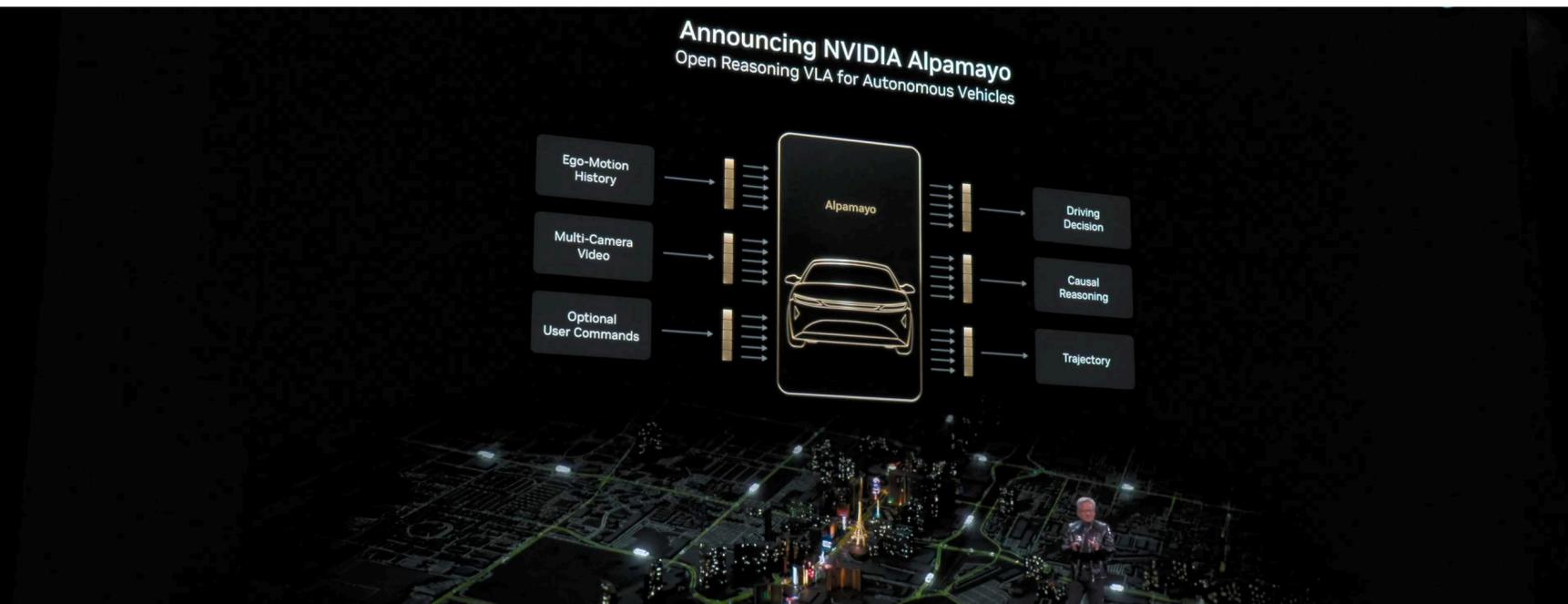
クルマは、もはや主役ではない。主役は、システムである。

WHEN THE CAR IS NO LONGER THE STAR

主役ではなくなったクルマ

自動車セクションには、かつてのようなドラマティックなコンセプトカーはほとんど見られなかった。10年前のCESは、どこかオートショーに近い雰囲気を持っていたが、現在ではその重心は明確に変化している。焦点は、モビリティを成立させる中核技術——センサー、コンピューティング基盤、ソフトウェアスタック、そして統合システムへと移っている。

Amazonは自動車開発における協業プラットフォームを強調し、NVIDIAは自動運转向けの新しいオープンAIモデルAlpamayoを発表した。こうした動きは、業界全体がソフトウェア定義型車両（Software-Defined Vehicles）へと加速していることを示している。そこでは、自律性は車両の造形やハードウェアそのものによって決まるのではなく、背後にあるシステムと知能によって形づくられていく。



04 HEALTH, TRUST, AND CREDIBILITY

ヘルスケア領域における信頼と信頼性

WHEN TECHNOLOGY HAS TO WORK

テクノロジーが「確実に動く」ことが前提になる領域

ヘルステック領域では、評価軸が明確だ。
新しさよりも、信頼できるかどうか問われる。



FDA-APPROVED HEALTH SYSTEMS

FDA承認済みの医療・ヘルスケアシステム

Venetian ExpoのIoTエリアは、今年は明らかに成熟した印象を与えていた。これまでのCESと比べ、コンセプト止まりのデモは大幅に減り、実際の市場投入を見据えた実用的な製品が中心となっていた。特にヘルスケア分野では、すでにFDA*認可を取得しているもの、病院で使用されているもの、あるいは実環境での検証が進んでいるデバイスが多く見られた。デザインの完成度も高く、仮説的なコンセプトではなく、日常利用を前提とした製品であることが明確だった。多くの企業が「いかに普及させ、いかにスケールさせるか」に焦点を移していた点も印象的だ。

FDA承認済みのOmnipodのインスリンパッチは、テクノロジーがすでに人々の生活に深く組み込まれている状態を象徴していた。一方で、Xandar Kardianのようなシステムは、その先の姿を示している。ウェアラブルを必要とせず、心拍や呼吸といったバイタルを非接触で計測するFDA認可のレーダー技術は、健康モニタリングを「操作するもの」から、空間に溶け込むインフラへと変えつつある。これらの事例が示しているのは、ヘルステックの進化が、もはや大胆なコンセプトではなく、信頼性、継続性、そして統合によって定義される段階に入っているということだ。

*FDA：米国における医薬品・医療機器の承認を行う規制機関。



OMNIPOD 5, WEARABLE INSULIN PUMP SYSTEM



XANDAR KARDIAN: FDA-CLEARED, CONTACTLESS HEALTH MONITORING.



MATERIALS AND READINESS

素材技術と製品化の成熟度

IoTエリアでは、目を引く「Wow」は多くなかった。しかし、着実な進歩が見られた。

土に還る生分解性素材を用いたFlintのペーパーバッテリーは、前年のラボレベルの試作から、量産を前提とした素材へと進化していた。サステナビリティも、もはやスローガンではない。

素材選定、製造プロセス、製品進化の中に自然に組み込まれ、静かに前進している。



Flintのペーパーバッテリー（CES 2025）。昨年展示されていたプロトタイプはケースに収められており、来場者が直接触れることはできなかった。2026年版と比べると、サイズが大きく、柔軟性も明らかに低かった。

AGE-TECH AS PROOF OF MATURITY

エイジテックが示す、テクノロジーの成熟

エイジテック（高齢者の生活や健康を支えるテクノロジー）や長寿関連製品の増加は、「誰のためのテクノロジーか」という問いへの答えを示していた。

転倒検知、補聴器、健康モニタリング。ここでは、新規性よりも、シンプルさと信頼性が重視されている。

会場にシニア層の来場者が多く見られたことも象徴的だった。これらの技術は、もはや実験ではなく、実生活で使われることを前提としている。



Withings Body Scan 2
科学的根拠に基づいた長寿ケアのためのステーション。信頼できるデータの活用や、複数指標の統合、長期的な健康管理を重視する流れが強まっていることが伝わってくる。

*“This is not technology for early adopters
—it’s technology for everyday life.”*

これはアーリーアダプターのための技術ではない。日常のためのテクノロジーだ。

SHIFT OF CES

A PLACE FOR GLOBAL GATHERING

グローバルな「集まる場」としてのCES

CESの価値は、展示内容そのものだけではない。異なる業界、地域、専門を越えた人々が集まり、会話が生まれることにある。

こうした対話は、単一のブースやデモからは得られない文脈を与えてくれる。デザイナーにとってCESは、トレンドを観察する場であると同時に、視点を共有し、思考を更新する場でもある。



CES 2026 MARKED A SHIFT TOWARD MORE GROUNDED,
SYSTEM-LEVEL INNOVATION.

**AS TECHNOLOGY BECOMES PHYSICAL AND AUTONOMOUS,
THOUGHTFUL EXPERIENCE DESIGN WILL SHAPE WHAT
COMES NEXT.**

CES 2026は、より地に足のついた、システムレベルのイノベーションへと移行した年だった。テクノロジーが物理化し、自律化する中で、Experience Designの質が、その価値を大きく左右していく。

THANK YOU, AND PLEASE REACH OUT WITH ANY QUESTIONS!

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
本レポートの内容について、フィードバックやご質問があれば、お気軽にお寄せください。

www.argentapark.com/

www.linkedin.com/in/sanae-wilson/

© 2026 Argenta Park. All rights reserved. 本レポートに掲載されている内容の無断転載・複製を禁じます。